

# 山口県立大学 郷土文学資料センターだより

## 「田中絹代ぶんか館」集客の可能性を求めて

吉田 房世 (田中絹代ぶんか館 学芸員)

多くの館が抱えている問題の一つに、入館者数の増加を図ることが挙げられるかと思えます。この度は弊館の現状と取り組みについて、報告したいと存じます。

大正13年(1924)に竣工されたこの建物は、電話局としての役目を終えた後に下関市の所有となり、市役所の別館として使用された後に解体されることになっていました。しかし、市民の強い要請により一転、下関市立近代先人顕彰館、愛称を「田中絹代ぶんか館」と命名され、平成22年(2010)に再び博物館施設として甦ったものです。

1階には「ふるさと文学館」を設置し、赤江瀑、田中慎弥、船戸与一、古川薫の肉筆資料の他、中本たか子、林芙美子、豊田行二、北川透など、地元縁のある作家の資料を収蔵・展示しており、2階には日本の映画史と言っても過言ではない女優・田中絹代の功績や遺品を紹介する「田中絹代記念館」を展開し、3階は文学館で紹介した本を読むことができる「休憩室」として、来館者に寛ぎの空間を提供しています。

しかし最近では、文学館、記念館としての機能もさることながら、「魅りのパワースポット」として徐々に注目を集めています。まず、建物の歴史が、奇跡的な生き残りを果たしている点。昭和20年(1945)の下関大空襲の際、一面が焼け野原となる中、本建物だけが残りました。そして平成に入り、老朽化のための取り壊しが議会で決定したにもかかわらず、住民の反対運動により撤回され、再び生き残ったのです。そうして耐震工事や化粧直しなどを行い、現在に至ります。この中で顕彰されている田中絹代も、戦後の傷跡がまだ拭いきれない昭和24年(1949)、日米親善使節としてアメリカに渡り、大いに先進的な文化を学びましたが、帰国時に集まったファンに投げキッスをしたことで反感を買い、社会的に低迷した時期がありました。しかし本人の努力や周囲の助けもあり、浮上した後は世界的に評価される女優として甦った人物です。館の前には、田中絹代の代表作でもある『愛染かつら』にちなみ、原作者の川口松太郎が着想を得たという長野県北向観音の霊木から分枝された「愛染桂の木」が旺盛な成長を見せています。こちらは葉っぱがハートの形をしていることから、恋愛成就への御利益があるのだそうです。映画『愛染かつら』は身分差とすれ違いを乗り越えて、最後には結ばれる物語。これにあやかりたいとお守りに葉っぱを持ち帰る方もいらっしゃいます。

このような学術的とは言えない流れは、本来の顕彰活動とは異なる動きかも知れません。しかし私たちはそこに着目し、この館が広く認知されることによってもたらされる相乗作用により、この土地の文化を築き上げてきた人物たちを知る「楽しみながら学ぶ」機会に繋げていきたいと考え、来館者にソーシャルメディアで拡散してもらえるよう、多角的な情報の発信と協力の懇請に尽力しています。



田中絹代ぶんか館外観



田中絹代



愛染カツラの葉



# ふるさとの俳人として

高張優子（山頭火ふるさと館 学芸員）

先月7日、開館一周を迎えた当館では、一周年記念セレモニーと同時に、「山頭火ふるさと館書道コンクール」の表彰式を開催した。市内の小・中・高校生を対象に夏休み期間中に作品を募集し、1190点の応募作品の中から厳正なる審査を経て22点を表彰した。

今回の書道コンクールは、防府市内の小・中・高校生という若い人たちに、防府出身の自由律俳人である種田山頭火に触れ、知っていただくきっかけになるよう、山頭火に関わる語を課題とした。具体的には、小学校1・2年生には「たび」、小学校3・4年生には「ふるさと」、小学校5・6年生には「水音」、中学生には「山頭火」、高校生には山頭火の句「雨ふるふるさとははだしであるく」を書いていただいた。これらの言葉は山頭火の人生および句において重要な意味を持つものばかりだが、特に「ふるさと」に対する思いは、山頭火を知る上で欠かせないと思う。

「故郷を忘れ難し、そして留まり難し。」

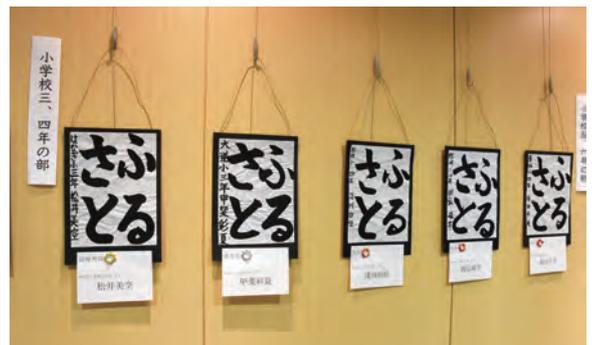
昭和12年2月4日の日記に記された一文である。ここに山頭火のふるさとに対する思いが凝縮されているように思う。ふるさとは決して捨て去ることはできない。けれども心の底から愛することもできない、という愛情と葛藤が見える。高校生の部の課題とした「雨ふるふるさとははだしであるく」の句からも、ふるさとへの複雑な思いがうかがえる。

ところで、日本文学の中で「ふるさと」を題材にしたものは数多くある。今、詩歌に限っていくつか挙げてみると、『古事記』中巻のヤマトタケルの歌「<sup>やまと</sup>倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山ごもれる 倭しうはし」が最も古いものと考えられる。「ふるさと」という言葉こそ使われていないが、この歌は『古事記』の中で、東国征伐の帰途、命尽きる寸前のヤマトタケルが、故郷である「倭」（現在の奈良県）を想うた望郷の歌とされているものである。

一気に時代を下り、山頭火と同時代になると、室生犀星『抒情小曲集』（大正7年）に、「ふるさとは遠きにありて思ふもの／そして悲しくたふもの」と、ふるさとを思う詩が収められている。また、山口県出身の詩人中原中也にも、『山羊の歌』（昭和9年）に収められた詩「帰郷」がある。さらに現代で一般的に知られているものでは、映画『耳をすませば』の主題歌「カントリー・ロード」の歌詞に、「カントリー・ロード／この道 故郷へつづいても／僕は 行かないさ／行けない」（訳：鈴木麻実子）とある。

このように「ふるさと」を題材とした詩歌は、古代から現代まで多く存在し、時代を超えて多くの人々の胸を打つ。山頭火もまた、ふるさとを離れてなおふるさとへの思いを句に詠みつづけた。

山頭火が忘れることのできなかったふるさと防府で、今後ますます山頭火が知られ、認められていくということが、当館の目指すところのひとつである。ようやく一周を迎えたばかりであるが、これからも多くの方々のご支援ご協力をいただきながら、展示活動や書道コンクールのような普及活動を続け、山頭火が今後ますます、ふるさとを愛したふるさとの俳人としてふるさとの人々に親しまれるようになることを願う。



書道コンクール受賞作品の展示風景



種田山頭火（旧小林写真館本店 小林銀汀 撮影）



# 本学図書館が大学図書館の基本的役割を果たすために —新米図書館長がつぶやく図書館資料の取扱い—

安光裕子（学術情報センター所長・図書館長）

本学図書館本館は、2021年4月、北キャンパスに全面移転する予定である。そろそろ移転計画の作成に着手する時期がきている。現在、頭を痛めているのは、図書館資料の取扱いについてである。図書館資料は年々増加しており、昨年度購入したものは、図書3,360冊（和書3,274冊、洋書86冊）および雑誌619種類（和雑誌562種類、洋雑誌57種類）である。これらを加えて、2018年3月31日現在、図書177,076冊（和書157,607冊、洋書19,469冊）および雑誌3,100種類（和雑誌2,809種類、洋雑誌291種類）を所蔵している。

では、これらの図書・雑誌を新図書館に収蔵できるだろうか。集密書架を配置しても、20万冊程度の収蔵能力しかないという。このままでは、移転してすぐに満庫状態になってしまうことは、想像に難くない。

文部科学省によると、大学図書館は、大学の教育研究に関わる学術の体系的な収集、蓄積、提供を行うことで、教育研究に対する支援機能を担い、大学図書館に蓄積された学術情報は、公開されることにより社会の共有財産として、学術情報基盤を構築しており<sup>1)</sup>、これらのことが大学図書館の基本的機能であるという。また、「大学図書館基準」では、大学図書館は、「大学の研究・教育に不可欠な図書館資料を効率的に収集・組織・保管し、利用者の研究・教育・学習等のための利用要求に対し、これを効果的に提供することを主要な機能」とするとある。これら大学図書館の機能は、大学を取り巻く環境がいかに変化をしようとも、決して揺るぐことのない大学図書館の機能であることは明確である。

これらの大学図書館の基本的機能を十分に果たすためには、図書館資料の充実が必須となる。大学図書館においては、すべての図書館資料を保存すべきだと、個人的には考える。が、如何せん狭隘な空間では、教育研究のインフラである、知の集積、学術情報基盤のための図書館資料を保存し続けていくには限界がある。

ここで、今夏話題となった「高知県立大学永国寺図書館の蔵書の除却」問題が頭をよぎる。昨年4月の新図書館への移転に向けて、約4年をかけて学内で検討を重ねた結果、38,000冊もの蔵書を焼却処分してしまったという。それは、新図書館の収蔵能力が旧図書館と同程度であったことも起因するらしい。決して他人事ではない。

そこで、就任してわずか半年の新米図書館長が、図書館資料の取扱いについて考えてみた。

本学図書館には、収集方針はなく、資料除籍基準のみ存在するが、内容的には必ずしも十分とはいえない。まずは、収集方針の作成および除籍基準の見直しを行いたい。それらの基準をもとに、現在の図書館資料の構成を見直し、新図書館への移転計画を作成したいと考える。場合によっては、図書館資料を除籍しなければならないかもしれない。しかし、利用頻度の比較的低い図書館資料を保存する書庫の設置（場所の確保）などして、除籍資料は最小限にとどめたい。本学図書館が、大学図書館の基本的役割を十分に果たすために。



書架から溢れた資料を入れた段ボール箱が並び書庫



新図書館外観完成予定図

注1)「大学図書館の整備について（審議のまとめ）-変革する大学にあって求められる大学図書館像-」（平成22年12月）。 ※下線は筆者による。

## 寄贈図書（2018年7月～2018年10月）

河野康子『歌集 島の入り江に』、杉山孫一『翻刻 片雲集』（第一集 全）、若月保治『近松浄瑠璃の本質と総合的研究』（上巻）、中原中也記念館『特別企画展 大岡昇平と中原中也』

## 寄贈雑誌（2018年7月～2018年10月）

『あらつち』第718号（あらつち社）、『其桃』第884～887号（「其桃」発行所）、『神戸女子大学 古典芸能研究センター紀要』第12号（神戸女子大学 古典芸能研究センター）、『秋芳町地方文化研究』第54号（秋芳町地方文化研究会）、『中原中也研究』第23号（中原中也の会）、『颯』第108号（颯文学会）、『風響樹』第50号（風響樹同人）、『文芸山口』第340～341号（山口県文芸懇話会）、『やまなみ』第35号（やまなみの会）、『山彦』第147～148号（山彦発行所）

## 国木田独歩とやまぐち

山口県内の各地に由縁を持つ、明治期の小説家国木田独歩に関する資料展示を行います。これを契機に国木田独歩とやまぐちの関わり合いに触れていただければと思います。

期間：平成31年1月8日（火曜日）～4月25日（木曜日）

場所：山口県立山口図書館 2階 ふるさと山口文学ギャラリー

主催：山口県立山口図書館、山口県立大学郷土文学資料センター

共催：やまぐち文学回廊構想推進協議会、山口県立大学国際文化学部文化創造学科

## 編集後記

今号では、下関市立近代先人顕彰館（田中絹代文化館）学芸員の吉田房世氏、山頭火ふるさと館学芸員の高張優子氏、山口県立大学学術情報センター・センター所長（図書館長兼任）の安光裕子氏よりご寄稿いただきました。来館者増への工夫、地域連携への取り組み、資料保存の重要性と、山口県内の文化施設が共通して抱える課題と問題点を、それぞれ具体的な事例とともにご紹介いただきました。郷土文学資料センターも含め、山口県内の文化施設が連携し、問題を共有して、互いに改善のヒントを出し合うことの大切さを痛感しました。ささやかながら、弊誌がその一助と成り得ていたら幸いです。（菱岡憲司）



柳井市の独歩旧宅



■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜畠 3-2-1）

TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251

■発行日：2018（平成30）年11月30日